

ピアソラへのオマージュ

川口裕志

少なくともこの 10 年の間に、ピアソラ (Astor Piazzolla) の音楽はまさしく世界に浸透した。そして、世界の音楽史の 1 ページを飾ることになったことは疑いないことだ。もっとも特徴的なことは、ポピュラー界とクラシック界を融合したことである。タンゴやジャズ・ポップスの畑で取り上げられるのは当然のことであるが、少なくないクラシック畑のプレイヤーが、このピアソラの作品の数々を演奏している。

アコーディオンの世界では、リシャル・ガリアーノ、シュテファン・フッソング (Stefan Hussong)、御喜美江、マッチ・ランタネン、ヤンネ・ラットウア、ミカ・バリューネン、ディビット・ファーマー、バンドネオンの小松亮太、他世界の数々のアコーディオニストらがその作品を取り上げてきた。今年になって、ピアソラ国際コンクール（数年前に開始）入賞者の演奏が武蔵野市民文化会館の企画としてお目見えしている。ミラ&ヨハンナ (ミラ・ウイルヤマーとヨハンナ・ユホラ) がピアソラだけのプログラムで一夜を飾る。

ピアソラはアルゼンチンで生まれた。当時のかの国は、軍事独裁体制化にあり、当然ながら自由な音楽活動が許されない状況下、多くの芸術家がそうしたように、ピアソラもフランス亡命。以後の創造活動はフランスを拠点に行うことになる。そうした緊張下の中、新しい作品を次々に生み出した。そして、その地でクラシックの作曲法を勉強し、ニュータンゴ (タンゴ・ヌーヴォ) あるいは現代タンゴと呼ばれる新ジャンルを切り開いた。ちなみに、リシャル・ガリアーノはピアソラの強い影響でニュー・ミュゼットというフランスのアコーディオン音楽を基盤に独自の世界を構築した。

「ちょっとひといきコンサート 2004」が今年も開催される。ここ 4～5 年、そのプログラムには必ずピアソラ作品が取り上げられ、その数、約 10 曲に登る。今回、地域のプロの音楽家たちがアコーディオンとの共演を求めてきた。ジャズピアニスト、クラシックピアニスト、二期会所属のアルトソリスト、ギタリスト、チェリスト、そして彼らの子どもたち。

14 年を数えるこのコンサートの質的転換期となった。

このコンサートでもピアソラ作品を軸に、ポピュラーとクラシックの融合が始まった。